様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 23 日現在

機関番号：12701
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009　～　2011
課題番号：21520568
研究課題名（和文）　高大連携の英語指導法の開発：第二言語習得プロセスにおける気づきの効果を応用して
研究課題名（英文）　'Effects of noticing in the process of second language acquisition: Implications and applications to English language teaching at high school and university levels in Japan'
研究代表者
佐野 富士子（SANO FUJIKO ）
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：30248893

研究成果の概要（和文）：①大学生が対象の場合は、事前の意識操作は、意味中心より言語形式中心のほうが、英語力の如何に関わらず効果が大であり、タスク活動による効果も遅延事後テスト時まで維持できた。事前の意識操作とディクトグロスの組み合わせが効果が最大であった。②高校生の場合は、英語力が中級であれば、事前の意識操作は言語形式中心のほうが、中級以下であれば、意味中心の意識操作のほうが、英文理解、英文産出、文法知識のすべてにおいて効果が大きかった。

研究成果の概要（英文）：1) A total of 194 Japanese university students participated in two studies, and assigned to two experimental and two control groups. Consciousness-raising and dictogloss tasks were implemented in two ways: form-focused and meaning-focused. Form-focused consciousness-raising group in each study outperformed meaning-focused consciousness-raising group regardless of their initial linguistic proficiency. The effects of noticing trough dictogloss tasks maintained longer in form-focused group than meaning-focused group. The results show that the combination of consciousness-raising and dictogloss tasks promoted noticing the target structure and LREs during the dictogloss tasks and prompted more frequent use of the target structure in reproduced texts than dictogloss task alone.
2) A total of 182 Japanese high school students participated in a series of three studies. Form-focused consciousness-raising and dictogloss tasks benefited intermediate-level students, while meaning-focused consciousness-raising and dictogloss tasks benefited beginning-level students in terms of comprehension, production and grammar knowledge.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：第二言語習得論、気づき、ディクトグロス、フォーカス・オン・フォーム、高大連携、英語指導法

１．研究開始当初の背景

(1) 第二言語習得研究の分野において、インプットの供給だけでは、効率よく外国語の習得を促すことは難しく、アウトプットやインタラクションが必要である、との認識が定着している(Swain, 1985; Ellis, 2008)。

(2) 加えて、インプット、アウトプット、インタラクションのいずれの段階においても、学習者が何らかの項目に気づくことの重要性が広く認められている(Schmidt, 1993, 2001; Ellis, 2008)。

(3) しかし、インプットを処理する際に、内容を理解しながら同時に言語形式にも注意を払うことは学習者にとっては困難であり、同時処理を行おうとすると、内容理解が阻害されることが明らかになっている(VanPatten, 1990)。

(4) いっぽう、第二言語習得を促進するためには、意味内容を重視した指導を行いながらも、言語形式の正確さも向上させる指導（フォーカス・オン・フォーム）の重要性も広く認められている(和泉, 2009)。

(5) ただし、フォーカス・オン・フォーム効果の実証研究の多くは、内容重視のタスク活動を行った後にフォームへフォーカスさせる指導の効果を測定したものであり、タスク活動の前に注意や意識の操作をして英文の内容理解を促進しつつ、言語形式への気づきを促進する研究はほとんど行われていない。

(6) 換言すれば、学習者の気づきの対象が、教師が計画していた項目とは限らないということを示唆しており、先行研究から得られる知見に基づいてシラバスを組むといった学校教育の場での対応が取りにくくなっている。

(7) 先行研究を見渡しても、研究参加者は大学生であり、高校生を対象にした研究はほぼ皆無に等しい。

２．研究の目的

(1) 統合的コミュニケーション(タスク)活動に取り組む前に、学習者の注意を事前操作することは、内容理解と文法理解を促進するのか。

(2) 上記(1)の結果は学習者の第二言語習得度やモダリティの制約をどのように受けるのか。

(3) 第二言語習得研究に基づき、内容重視の指導と言語の正確さ重視の指導を統合するタスク活動を開発・改良し、その効果を測定する。

３．研究の方法

(1) 2008 年（パイロットスタディ）

①科研費研究を始める準備として、研究代表者が所属する大学の 1 年生を対象に、統合的コミュニケーション活動として、聞いたことをもとにして仲間と話し合いながら共同で文章を作り上げる、というタスク(ディクトグロス)を用いて、タスクとテストの妥当性と信頼性を確認するとともに、フォーカス・オン・フォームの効果も確認した。

②科研費研究初年度に行う高校生対象の実証研究の準備として、使用する教材一式を作成した。作成にあたっては、高校生がタスク活動に興味深く取組み、英語を理解できるよう、トピックの興味度調査、言語の難易度調査、未知語の数調査、内容理解度調査を行い、タスクとテストの妥当性と信頼性を確認した。

(2) 2009 年（研究初年度）

前年度のパイロットスタディも含め、研究①～⑤まで、すべて、実験群（言語形式中心グループと意味中心グループ）と統制群の合計 3 グループを用い、事前、事後、遅延テストを実施してタスク活動の効果を測定した実証研究である。データは、1）文法性判断テスト、2）英文作成テスト、3）共同英文作成タスク、4）生徒の発話を集めた質的データ、5）気づきが起きた箇所に関するアンケートの 5 種類を収集した。データ収集のタイミングは、以下のとおりである。

1 週目：事前テスト
4 週目：ディクトグロス（練習）
5 週目：ディクトグロス（データ収集）、直後テスト
10 週目：遅延事後テスト

それらを統計分析し、質的量的データを統合的に分析した。

①高校生 2 年生を対象に、事前・直後・遅延テストデザインを用い、仮定法過去を使った文章を作成する力についての実証研究を行った。ディクトグロス活動を行う前の意識操作、つまりフォーカス・オン・フォームとフォーカス・オン・ミーニングがその後の文章作成にどのような影響をもたらすか、仮定法過去を使った文章を産出する力が伸びるか、ディクトグロスを用いて探究した(研究 1)。

②上記、1 学期に行った研究と同じ手順で、3

学期に仮定法過去完了を取り上げて、高校での学習を積み上げると同時に、異なった文法項目でもフォーカス・オン・フォームの影響が同じであるか、探究した(研究 2)。

③文法項目は仮定法過去完了に揃え、英語到達度の違いを調べるため、大学生を対象に同じ手順で、事前の意識操作とディクトグロスを通した気づきの効果を測定した(研究 3)。

(3) 2010 年（研究 2 年目）
④高校 1 年生を対象に、文法項目も関係代名詞に変え、同じ手順で、事前の意識操作とディクトグロスを通した気づきの効果を測定した。また、研究 1〜3 までと比べて、量的データだけではなく、質的データも収集・分析することに重点を置き、気づきが第二言語習得のプロセスにどう結び付くか解明を試みた(研究 4)。

⑤大学生対象の研究 3 の精度を高めるため、産出力テストに改良を加えた。文法項目は同じ仮定法過去完了を取り上げ、気づきの影響を、より正確に測定した(研究 5)。

(4) 2011 年（研究最終年度）
科研費研究の最終年度であるので、新たなデータ収集は行わず、研究①〜⑤のまとめとして考察を深め、サマーセミナーや教員免許更新講習での発表に努めた。

４．研究成果
パイロットスタディと研究 1〜5 の成果は、国際学会 3 件と国内の学会 2 件にて発表した。
①パイロットスタディ：TBLT2009（イギリス、ランカスター大会）'The effect of metalinguistic information in conjunction with dictogloss tasks on L2 learning'
　明示的な言語形式指導とインプットをより多量に与える暗示的な言語形式指導では、仮定法過去完了の発達にどのような影響があるか測定した。またその影響には、学習者の英語到達度がどのように影響するかを併せて測定したところ、明示的であれ暗示的であれ、両群に文法性判断テストにおいて伸びが見られたが、明示的指導グループにより大きな伸びがみられた。文章作成力については明示的指導群の方が顕著な伸びを示した。
　また、学習者がタスク活動を行っている最中に言語上の問題に遭遇し、それについて学習者同士が第二言語で話しあうと、第二言語習得が進むと言われているが、この研究では学習者の母語を使用しても同様の効果があることが示唆された。

②研究 1：第 35 回全国英語教育学会（鳥取大会）「高校におけるディクトグロス活動の効果―気づきと英文作成力との関連を中心として」
　2 つの高校で、それぞれ意味中心と言語形式中心のグループを比較したところ、英語到達度が高い高校では、直後テストでは言語形式グループに大きな伸びが得られた。意味中心グループでは統計上の有意差はあったものの小さな伸びにとどまり、統制群にはタスク活動による影響はみられなかった。しかし、英文作成量については、意味中心グループの伸びが大であった。
　一方、英語到達度がもう一校より高くない学校では、意味中心の意識操作のほうが英文理解と英文産出に効果があった。しかし、言語形式であれ、意味中心であれ、タスク前の意識操作には効果があった。ただしタスク活動の効果の持続はむずかしく、繰り返し、タスク活動を行う必要性を示唆している。

③研究 3：BAAL2010（イギリス、アバディーン大会）'Differential effects of pre-task consciousness raising tasks and collaborative dialogue on the learning of English Present Perfect Tense'
　高校生を対象に、関係代名詞を使った文章を共同で作成するタスクを課し、タスク前の意識操作の違いによる影響を測定した。
　言語形式に関する意識操作を行ったグループでは直後テストで大きな伸びがあったが、遅延テストでは伸びが戻った。原因は高校生の英語力が中級以下であったことから、知識の維持が難しかったと推測される。
　意味中心の意識操作をしたグループでは、直後テストで若干の伸びがみられ、遅延テストでも伸びが維持できていた。このことから、意味中心の授業を行えば、英語力の維持はできるものの、大きく伸ばすためには、言語形式の意識操作も組み合わせ、なおかつその指導と組み合わせたタスク活動を繰り返し実施しなくては英語力の伸びの維持は期待できないと推測できる。

④研究 4：第 36 回全国英語教育学会（大阪大会）「フォーカス・オン・フォームが英文産出に及ぼす影響」
　高校 1 年生が困難を感じる現在完了形を指導するにあたり、タスク活動を行う前の意識操作では、言語形式中心と意味内容中心とでは、どちらが英文理解度、英文産出量、産出した文章の質、現在完了形の使用、にどのような影響をもたらすか測定したところ、言語形式に関する事前の意識操作を行ったグループが文法操作力については大きく伸びた。特に、成績上位者は、文法テスト、現在完了形の使用頻度、英文産出力、英文の理解度、作成した文章の質のすべてにおいて伸びが大きかった。

一方、意味中心の意識操作群については、英文理解度、英文産出量、現在完了形使用頻度について、言語形式群より伸びが大きかった。特に成績下位層の伸びが、言語形式群より大きかった。

以上の結果から、高校生で英語力が中級以上であれば、言語形式の事前意識操作が好影響をもたらすが、英語力が中級以下であれば、むしろ意味内容中心の事前意識操作のほうが、英語力全般に好影響をもたらすことが示唆される。

⑤研究 5：TBLT2011（ニュージーランド、オークランド大会）'The effects of consciousness-raising and dictogloss tasks on L2 learning'

大学生を対象に、実験群と統制群を使って、言語形式に関する意識操作の効果を測定した。先行研究では、事前の意識操作を行わないため、本研究では、事前の意識操作野有無によって、直後テストだけではなく、遅延テストにも引き続いてどのような影響があるかを探究する意味で、独自なデータ収集となった。

実験群では事前に意識操作し、統制群では先行研究にあるように事前の意識操作は行わず、タスク活動（ディクトグロス）のみを行った。

その結果、両群ともタスク活動の影響で英文作成力、文法力が伸びたが、実験群の伸びが大きく、遅延テスト時までその効果が維持できた。統制群の文法性判断テストでは直後テスト、遅延テストと、継続して伸びが見られたことは、ディクトグロを用いたタスク活動の効果がみられたと解釈できる。しかし、英文作成力については、遅延テスト時に若干の下降があったことから、事前の意識操作なしでは、ディクトグロスの効果は長くは維持できないとも解釈できる。

なお、研究 2 のデータ収集時に、高校での時間の調整が予定通りに進行せず、データは収集したものの、実験群に信頼性に問題があると判断したため、統制群の文法テストの伸び、英文作成力の伸びは大きく、遅延テスト時まで維持できていた。高校で実験を行う際の時間割で前の時間の授業が何であるかも影響するためこの調整は今後の課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 5 件）

①佐野富士子・原田淳・片山浩樹・鈴木聡.(2010).「フォーカス・オン・フォームが英文産出に及ぼす影響―気づきの効用」第 36 回全国英語教育学会 大阪研究大会. 2010 年 8 月 7 日(土).

②佐野富士子・原田淳・片山浩樹・鈴木聡.(2009).「高校におけるディクトグロス活動の効果―気づきと英文作成力との関連を中心として」第 35 回全国英語教育学会 鳥取研究大会. 2009 年 8 月 8 日(土).

③ Sano, F. (2011). The effects of consciousness-raising and dictogloss tasks on L2 learning. Paper presented at TBLT 2011 (Task-Based Language Teaching, 2011 Conference), Auckland, New Zealand. Friday, November 18, 2011.

④Sano, F. (2010). Differential effects of pre-task consciousness-raising tasks and collaborative dialogue on the learning of English Present Perfect Tense. Paper presented at BAAL 2010 (British Association for Applied Linguistics 2010 Conference), Aberdeen, UK. Friday, September 10, 2010.

⑤ Sano, F. (2009). The effect of metalinguistic information in conjunction with dictogloss tasks on L2 learning. Paper presented at TBLT 2009 (Task-Based Language Learning 2009 Conference). Lancaster, UK. Tuesday, September 15, 2009.

〔図書〕（計 1 件）

佐野富士子・岡秀夫・遊佐典昭・金子朝子（編集）(2011)『英語教育学大系　第 5 巻　第二言語習得―SLA 研究と外国語教育』（大修館書店.総頁 302 頁.

〔その他〕

①招待講演会

日時：2011 年 5 月 14 日（土）16:00-17:30

講師：Dr. Shinichi Izumi (上智大学)

演題：'Task-based language teaching and focus on form'

会場：横浜国立大学みなとみらいキャンパス

②招待特別授業

日時：2011 年 10 月 14 日（金）13:00-14:30

講師：Professor Rod Ellis （University of Auckland, New Zealand）

演題：'Consciousness-raising tasks for grammar teaching'

場所：横浜国立大学教育人間科学部

③ビデオによる公開授業の解説
日時：2010 年 10 月 30 日（日）
学会：ELEC 同友会英語教育学会全国大会
解説者：佐野富士子.
演題：「第二言語習得の観点から見るリプロダクションの意義と役割」

④講演
日時：2011 年 8 月 12 日(金)
学会：ELEC 同友会英語教育学会サマーワークショップ
講演者：佐野富士子
演題：「フォーカス・オン・フォームを効果的に行う方法」

⑤2009 年度教員免許更新講習　英語科選択
佐野富士子担当「第二言語習得と外国語教育：学習成果を高める英語指導」

⑥2010 年度教員免許更新講習　英語科選択
佐野富士子担当「第二言語習得研究の成果を取り入れた英語授業の実践」

⑦2011 年度教員免許更新講習　英語科選択
佐野富士子担当「第二言語習得を促すタスク活動」

６．研究組織
(1)研究代表者
佐野　富士子（SANO FUJIKO）
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：30248893

(2)研究分担者
なし　　（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
長崎　睦子（NAGASAKI MUTSUKO）
聖学院大学・人文学部欧米文化学科・准教授
研究者番号：90406546